

博物館教育員実習の試行(2000～2003)

Report on Investigation and Research Activities

小島道裕

1 目的

国立歴史民俗博物館では、開館以来、人員の未整備等を理由に、学芸員実習相当の学生向け実習は基本的に受け入れていなかった⁽¹⁾。

しかし、当館における博物館教育のあり方をさぐるために「教育プロジェクト」が設置され(1998～2002年)、またこの間に科学研究費「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」(基盤研究B(2)、2000～2003年度、代表：佐原真・小島道裕)を取得することができたため、その実践的な研究活動の一部として、新たな実習の試行を行うこととした⁽²⁾。

現在その養成が課題となっている博物館における教育担当職員(教育員、エデュケーター)の養成課程を研究することがその目的であり、2000年～2003年の4年間、4度にわたって実習を実施した。

2 対象

教育担当職員の養成という場合、学生などを対象とする就職以前の課程の他、現役の職員を対象にした研修的なものも考えられ、これについても、文化庁と共催の「歴史民俗資料館等専門職員研修会」において演習を取り入れたカリキュラムを試み始めている。それについては別に報告することとし、本稿では、前者の学生等を対象とする実習について述べたい。また、期間としては、中・長期的なインターンとしての実習も考えられるが、今回の実習は、夏休みを利用した1週間程度の短期実習として行っている。ただ後述するように、ここで検討したカリキュラムは、中長期の実習などについても応用が可能と思われる。

対象の学年は、当初は制限を設けなかったが、ある程度の知識と社会経験が必要であることから、第2年次からは学部3年生以上とした。上限は特に設けず、修士・博士課程の学生も参加したほか、卒業後の学生も若干参加している。参加大学は、科研メンバーでもある千葉大学教育学部の長田謙一氏の協力を得て募集を行ったため、そこからの参加が多いが、目的に合致する範囲で、他の大学からの希望者も受け入れた。

3 日程と参加人員

年度ごとの日程および参加者数と学部・学年等の内訳は、以下の通りである。

①2000年8月1日(火)～7日(月)

9名(教育2年1名・3年2名, 教育修士2名, 教育博士1名)

聴講3名(教育修士2名, 文4年1名)

②2001年7月31日(火)～8月6日(月)

5名(教育3年2名・4年1名, 教育修士2名)

③2002年7月30日(火)～8月5日(月)

9名(教育3年3名・4年2名, 文4年1名, 文化遺産4年1名(留学生), 社会人⁽³⁾1名)+聴講1名(文修士卒)

④2003年7月30日(水)～8月7日(火)

6名(教育4年3名・修士2年1名, 人文修士1年1名, 文化科学博士1名)

日程は、実習での対象となる観客が多い夏休み中の、しかもピーク(お盆前後)ではない7月末から8月初めを選び、特に観客が多い土曜・日曜に展示室での実習ができるように設定した。

4 実習の内容

実習の内容としては、博物館における教育の主たる対象である観客について、具体的に理解することを基本としている。すなわち、展示室において観客の支援を行いながら、観客がどのように行動しているかを観察すること、またプログラムの受付や回収を行いながらインタビューを行うことなど、ひとりひとりの実際の観客に接することで観客について学ぶ、ということである。

カリキュラム全体としては、展示室における実習の前提として、課題図書や講義によって博物館教育について学習し、当館における教育活動について理解すること、また、担当者から展示室の解説を受けて、展示の意図について学ぶことを行った。

そして、展示室で観客と接する過程を経た上で、観客に対してどのように働きかけたらよいかを考えるために、教育プログラムを制作・発表させることとした。

なお、今回は博物館教育員の養成という観点から実習を行ったが、観客に接する経験や観客について学ぶことは、社会教育機関としての博物館職員には不可欠であり、一般的な博物館実習の課程としても有効で、普遍性が高いと言える。資料の扱い等は専門性が高く、分野によって修得すべき技能が全く異なるため、むしろ大学の専門課程や就職後のオンザジョブ・トレーニングが適当であるとも言えよう。

カリキュラムは、以上のような基本的な点は4年間同じだが、状況を見ながら少しずつ変更を加えた。当初は、上記のような内容を比較的単純に割り振っていた(表1)が、初日に講義が集中す

表1 実習スケジュール 第1次(2000年8月1日(火)～8月7日(月))

1日(火)	2日(水)	3日(木)	4日(金)	5日(土)	6日(日)	7日(月)
9:00～9:40 佐原館長の講話 9:40～10:50 講義①「当館の展示および教育活動について」 (久留島:歴史) 10:50～12:00 講義②「ワークシートを用いた教育活動」 (小島:歴史)	9:30～12:00 展示説明 第1展示室 (阿部:考古) 第3展示室 (山本:歴史)	9:30～12:00 展示説明 第2展示室 (高橋一:歴史) 第4展示室 (上野:民俗)	9:30～12:00 展示説明 第5展示室 (高橋敏:歴史) 企画展示室 (西本:考古) 「北の島の縄文人」展	9:30～11:00 くらしの植物苑 (辻:歴史) 「伝統の朝顔」展 佐倉城址公園見学 11:00 名札, 景品作成	9:30～ 自由課題(ワークシートの制作)	9:30～ (ワークシートの制作) 親子クイズアンケート集計
13:00～14:00 講義③「観客調査の理論と方法」(竹内:推進員) 14:00～15:00 文書整理(第一調査室) 伊能家文書の整理(封筒詰め, 目録取り) 15:00～16:00 施設見学(椿阪:展示課) (トラックヤード, フィルム保管室, コントロールセンター, 救護室) 16:00～17:00 館内自由見学 17:00 警備員と顔合わせ 終了	13:00～ 親子クイズに挑戦 16:30 意見交換 17:00 終了	13:00～ フロアスタッフ体験 (1室, 2室, 3室) 16:30 意見交換 17:00 終了	13:00～ 観察法による動線調査 (2室, 3室) 16:30 調査の集計, 意見交換 17:00 終了	13:00～ 観察法によるハンズ・オン展示利用調査 (1室, 2室=4ヶ所) 親子クイズに関する面接 (5室出口) 「大工道具展」 ギャラリートーク見学 (13:30～14:00) 16:30 調査の集計, 意見交換 17:00 終了	13:00 (ワークシートの制作) 貝玉づくり教室見学 (13:30～14:30の間) 16:00 「自由研究相談室」担当者の話 16:30 (ワークシートの制作) 自由解散	13:00 (ワークシートの制作) 14:00 親子クイズアンケート集計結果発表 作品発表 意見交換 16:00 終了

☆課題: 親子クイズの集計

ると実習生の疲労が激しく効果が上がらないといった理由から、内容を適宜分散し、休日も設けた。(ただし、休日を設けることには、休息と考察の余裕ができてよいという意見と、中断せずに行った方が効果的であるという意見の両方の反応がある。)

また、当初は施設見学を兼ねて、古文書整理の体験や「くらしの植物苑」見学なども含めていたが、時間的に困難な面があり、より目的に絞った内容になった。特に後者の植物苑見学は、ユニークな教育活動の面のみならず、環境史の専門家である植物苑担当教員の解説自体が好評であり、後述するように展示担当者のお話を聞く機会として反応が大きかったのだが、直接の実習場所ではなかったため、期間中のカリキュラムとしては省略せざるをえなくなった。

最後の教育プログラム制作は、初年度は観客調査等も含めた自由課題としていたが、実際はそこまでの習得は難しく、全員が実習中に体験したものと同一ようなワークシート形式のプログラム制作を行ったため、2年次からは、教育プログラム制作を最初から課題として明示することにした。

4年目の最終的な時間表が表2であり、全体のカリキュラムは次のようである。

実習カリキュラム（最終版。表2参照。）

1 事前学習

①課題図書

『博物館体験』（フォーク；ディーキング著，雄山閣，1996年）などの課題図書をあらかじめ読ませ、特に「観客にとって博物館とは何か」を考えさせる。

②歴博展示の事前見学（1日）

個人単位で自由に見学し、実習現場となる展示室の全体を自分なりに理解する。

また、展示室で行われているワークシートによるプログラム（「れきはく親子クイズ」）を体験する。

——以上をふまえて、課題図書と歴博展示についての感想と意見、および博物館職員としての抱負についてレポートを提出させる。これを参加条件とする。

2 ガイダンス・講義（1日分）

ガイダンスによって、実習の内容と流れを理解させる。

講義によって、博物館教育の目的と方法および当館の活動を理解させる。

当館の施設を確認し、フロアスタッフ（警備員）と顔合わせを行う。

3 展示解説（1日分）

各展示室担当者の解説を聞き、展示の趣旨を理解するとともに、展示についての意見交換を行う機会を設ける。

4 実習—展示室での対応業務と新プログラムの実施（3日分）

・展示室で、教育プログラムを実際に行わせる。

・展示室に立たせて、観客の観察と必要に応じた案内などの支援、および期間中に行われている

-
- 「親子クイズ」などの教育プログラムの観察と支援を行う。
- ・新しいプログラムを試行し、結果を集計・分析する。(受付作業も行う。)
- または、展示室での観客の行動を調査・分析させる。

5 教育プログラムの制作と発表(2日)

6 事後レポート

実習で学んだことを中心に、博物館における教育のあり方についてレポートを作成する。
合計日数：7日(+事前学習・事後レポート)

5 実施結果

実習を行った結果について、実習生の現場での反応やレポートをもとにまとめれば、次のようである。

①講義

最初に目的や方法について学ぶことは、実習の意味づけとして有効である。また、実習の全体の構成と意味について最初に理解させることは、期間中どのステップを行っているかを自覚することができるとして好評であった。

講義の内容としては、博物館教育自体の理論や方法、あるいは他の博物館における事例などをさらに補う必要があるが、これは実習期間中に行うことは難しい面があり、むしろ大学での講義に任せるべき部分かと思われる。大学における教育との連携が必要である。

②担当者による展示説明

展示室での展示担当者による解説は、当初は展示室に立つ上での基本的な知識として行ったが、その目的を超えて、予想以上のきわめて強い反応が見られた。レポートでも、「展示室を企画した先生方の語っている姿の熱心さに感動した」「それまでよそよそしかった展示物が急に身近なものに思われるようになった」といった反応が多かった。展示者の意図や熱意を知ることと、それが観客にはうまく伝わっていないというギャップを認識することは、教育活動への動機付けになるため、実習における不可欠な要素であると言え、実習のコーディネーターとしては、多くの担当者の協力を得る必要があるため大変であるが、毎年すべての展示室について実施することとした。

③教育プログラム体験

観客と同じ体験をしておくことは不可欠であり、当初は実習期間内に行っていた。しかし最終年度は、通常のプログラムは事前学習で行わせ、実習期間中には、次項にあるように、学校向けのプログラムを家族向けに適用するといった、新しい試みのための準備として教育プログラムの体験を行わせた。

④フロアスタッフ体験と観客調査およびプログラム試行

展示室に立ってのフロアスタッフとしての体験や、観察・インタビューなどによる実際の観客との直接のふれあいは、予想通り反応が大きかった。それまで一般的・観念的な存在としてイメージ

していた「観客」ではなく、個人としての観客に接することで、具体的なイメージを持つことができるようになる。インタビューについては、やや困難かと思われたが、「親子クイズ」というプログラムに参加した観客を対象としたため、具体的な質問を行え、また観客も協力的で、予想以上にスムーズに行うことができた。

フロアスタッフ以外の作業としては、1年目は動線についての観客動態調査を行ったが、2年目は実際に試行していた子供用解説ラベルの評価を実施。3年目は、新しく用意したプログラム(れきはくクイズ「中学生～大人版」)を受付作りから評価まで試行。4年目は、単眼鏡を用いた学校用プログラムを改善して家族向きに試行した。

プログラムの評価や試行は、制作したプログラムの試行・評価がどうなされるかを知ることができると、後述するように、最後に課題として制作するプログラムが、実際に試行された場合の手順を先取りして経験する効果もある。中・長期的な実習課程であれば、実際に制作した教育プログラムを試行・評価することが可能であるが、今回のような短期の課程でも、それに代わる内容を盛り込んでいると言える。

⑤教育プログラム制作

先述のように、第1年次は当初「自由課題」として観客調査も想定していたが、実際には困難で、全員がワークシート制作を希望する結果となった。そのため、第2年次からは、最初から「教育プログラム制作」として、実習のはじめから考えさせることにした。結果として、展示を知り、観客を知った上で、何ができるかを考える、という一貫性のあるプログラムになったと言える。自分でプログラムを作ることを前提にしたため、目標が達成感が得られる、またプログラムを作る側の視点で最初から考えることができる、といった効果があった。

6 成果と課題

成果

実習を試行した成果としては、博物館教育員短期養成プログラムの基本的枠組みを一応定式化することができたことを挙げられる。

観客の理解に重点を置いた汎用性のある内容であり、それをステップを踏んだ構成にまとめたものである。順を追って整理すれば、次のようになる。

- | | |
|-------------------------|----------------|
| ①教育活動の理念と実践について学ぶ(講義) | [目的と方法を知る] |
| ↓ | |
| ②展示担当者の意図を知る(展示解説) | [展示を知る] |
| ↓ | |
| ③利用者体験(館内見学、プログラム体験) | [観客を知る①観客の立場で] |
| ↓ | |
| ④利用者の観察とサポート(フロアスタッフ体験) | [観客を知る②職員の立場で] |
| ↓ | |

⑤利用者の反応を知る（観客調査）	〔観客を知る③客観的に〕
↓	
⑥教育プログラムの制作（ワークシート等制作・発表）	〔何ができるかを考える〕 観客への働きかけ
↓	
⑦教育プログラムの試行・評価・改善	〔実際に行ってみて評価する〕
※短期では⑤として。中長期では⑥の後に。	その結果の検証

課題

試行とその結果について、専門性や汎用性の問題、およびカリキュラム内容について、関係者から以下のような指摘があった。これについて検討してみたい。

- ・専門分野が異なる（歴史系でない）と、専門性が要求される展示ではプログラム制作がうまくできない。最初から「教育員」として養成するより、学部では歴史等をまなび、その上で教育、といった形がよいのではないか。
- ・教育員養成というよりも、むしろ学芸員の必須科目、ととらえた方がよい。
- ・「教育員」としての専門性はどうか。
——こうした疑問は、博物館での教育の担い手は誰か、という根本問題にもなり、二者択一ではないと思われるが、最初は未分化でもよいのではないだろうか。また、学芸員と教育員は実際には協働する必要がある、これは最低限の共通研修的なものととらえることもできよう。より専門的な研修プログラムは、別途開発する必要がある。
- ・参加者が教育学部の学生だったため、「教育」についての意識や資質があり、そのためにうまくいった面があるのではないか。
- ・実習以前の前提として何をさせておくべきか考える必要がある。
——これについては、大学とどのように連携するかが重要であろう。実習の前提として、大学側で何を教えるべきかを検討し、協議する必要がある。教育学自体を博物館で教えることは困難であり、いわば医学における基礎と臨床の区別にたとえることができるかもしれない。
- ・参加者は、実際には学校教員の予定者が多い。教員となって博物館を利用する上で役に立てばよいが、それが目的なら教員用のカリキュラムが必要ではないか。
——教員にとっても博物館利用の方法の習得は必要であるが、博物館における実習としては、教員としての立場で考えるよりも、むしろ博物館職員の側で考えることにメリットがあると思われる。博物館を有効に利用するためには、学校教育と博物館教育の違いに気づくことが重要である。
- ・プログラム制作は本来の目的ではなく、「観客を知ること」を中心にした方がよいのではないか。
- ・観客の客観的な行動調査（1年目）よりも、学習効果の調査の方が意味があるのではないか。
——プログラム作成の立場に立つことで、観客の理解も深まり、また課程が完結する。
また、展示室における無前提の行動調査よりも、教育プログラムを実施して観客に働きかけた結果どのような反応が出るか、というプログラムの評価にシフトしてきている。今回は短期実習であるため、館の側が用意した教育プログラムの試行・評価になったが、実際に実習生が制作し

たプログラムの試行・評価を行えば、中長期のプログラムになりうると考えられる。(前出表の⑦の過程)

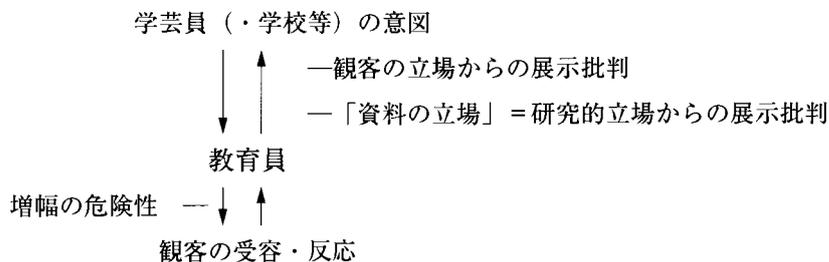
おわりに

最後に、この実習を通して得られた博物館における教育担当職員のイメージについて触れておきたい。

先述したように、展示担当者の解説には強い反応が見られ、また観客の理解との間にギャップがあることに気づくことから、両者を介在することへの動機付けが生まれると考えられる。しかし、その先にどのような教育プログラムを構想するかが問題であり、注意しないと、知識や特定の見方を教え込もうとする、一種の「原理主義」に陥る危険性もはらんでいる。特に、個人にもよるが、「教える」ことを専門とする教員志望の学生にその傾向が強い。

学芸員の展示シナリオや、学校のカリキュラムなど、特定の意図を増幅して教える立場に立ってしまうと、自由な学習を特徴とする発見や驚きの場としての博物館を否定することになりかねない。これを防ぐためには、一つには「逆のルート」、すなわち観客の立場から展示を批判することが必要であり、また「別のルート」、すなわち資料のもつ多義性（「資料の立場」）を生かした、研究的立場からの展示批判（つまり「本当にそうか」「他の見方はないか」といった視点）も必要であると考えられる。

ただし、観客の立場などを気にしすぎると、博物館展示の持つメッセージ性の否定になる危険性もあるため、結局のところ、展示を作る側と展示を見る（体験する）側双方からの視点を持ち、また、展示自体に対する批判的姿勢とその能力を持つことも必要と思われる。以上の関係をあえて図示すれば、次のようになろう。



すなわち、博物館教育において必要なのは、「教える人材（能力）」ではなく、双方（ないし「資料の立場」を入れた三方）を理解し、批判的に仲介できる人材（能力）であり、博物館における教育活動は、そうした立場の職員によって、検証されながら行うことが望ましいと考えられる。最近博物館の特質を表す表現として眼にする「一緒に考えよう」ということ—観客とも、学芸員とも一緒に考えるということ—が、教育担当職員には特に重要であると思われるのである。

註

- (1)——国立歴史民俗博物館 1991『国立歴史民俗博物館十年史』の概要およびレポート，制作プログラムなどの資料を掲載している。
- (2)——教育プロジェクト年次報告書『れきはくへいこうよ 1998～2000』（国立歴史民俗博物館，2001年），『同2001』（同2002年），『同2002』（同2003年）にも，各年度の概要およびレポート，制作プログラムなどの資料を掲載している。
- (3)——総合研究大学院大学日本歴史研究専攻出身の文化財担当職員。
-

〔付記〕 実習の実施は，竹内有理氏（国立歴史民俗博物館非常勤研究員）と共同で行なった。また，実習にあたっては，多くの当館教職員の協力を得た。記して謝意を表したい。

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2004年5月17日受理，2004年7月21日審査終了）